最期の同伴者
―フランツ・シナトラ氏かく戦へりー

玉井洋子

はじめに

醒め際に話しかけてくる男がいる。見覚えのない顔だがいつかどこかで会ったような気もする。舞台は三ノ宮駅前「そごう百貨店」東へ徒歩五分のところ。北村ビル二階。「山賊の住処」などと揶揄されながら、ここでいろんな集会があり、人々が集った。赤茶けた長いすに緑の縦縞の座布団が三枚。つるつるしたベニヤ板壁には十号ほどの油絵がかかっている。それには市民同友会発祥の地、新開地時代の三角屋根の建物が描かれている。

男は横柄に長いすに身を横たえたまま天井の煤けた火災報知機を長い棒でさしながらいうのだ。「これは年代ものですよ」。室内のシチエイションはそのままだが、私が勤めていた頃の事務所にはそんな文明の利器はなかったので男の話はうさんくさいのだが、仔細ありげで無視もできない。

セピア色の『市民同友会三十周年記念誌』を読みながらついうとうとしてしまったようだ。

燃え尽きた市民同友会と私

私は一九八一（昭和五六）年知人の紹介で、君本昌久氏の主宰する文学塾「市民の学校」の門をたたいた。六年後その親団体である社団法人・市民同友会の事務局に勤めることになる。受講生として六年、事務局勤務十二年、都合十八年を君本氏の近くにいた。

そこで、私はそれまで自分の生活圏では会ったことのない人たちと出会った。君本氏をはじめ、書店に著作のならんでいる詩人や作家、あらゆるジャンルの芸術家、弁護士、医師、国会議員、大学教授、県知事までが会員名簿にズラーと名をつらねている。

週に三日の勤務で月六万円。しかもどの講座もフリーパス。願ったりかなったり、二つ返事でひきうけたが、勤めの経験のない主婦の片手間でできる仕事ではなかった。

ここでの仕事の大半が二百余名の会員にむけてのコミュニティペーパー「市民情報」の発送と、同紙の広告料の集金、会費請求事務。講義のある日は夜まで居残って戸締りをして帰るなど。当時は通信物の印刷はガリ版刷りで、宛名はすべて手書き。これにも手こずったが、長年それでたたきあげてきた君本さんは、こういう文化を失うのはペケで、古い道具を使いこなせるのは「エエ線」なのだった。

講義が終り戸締りをして、そのまま駅へ向かって帰宅、とはならない。ここからはじまる夜が君本流「学問」の時間なのである。学問をするのは「夜」にかぎると彼はいう。

「市民の学校」の授業が終わって街へくりだし、三宮センター街横の餃子屋「ユニコン」の二階座敷に上がりこみ、夜更けまで講師を囲み、文学談議に火花をちらす。飲み、うたい、議論し、気がつくと終電車が出たあと、なんてことも。酔いがまわると車座になって赤色エレジーや野坂昭如の「黒の舟歌」をよくうたったものだった。

―男と女の間には　深くて暗い川がある　だれもわたれぬ川なれど　エンヤコラ今夜も舟をだす…

シャイな君本さんが照れてわざと調子をはずしてうたうのがおかしくて、かなしくて Row and Row Row and Row。

市民の学校を主宰する君本さんは「市民同友会」の事務局長であり、そこに事務局をおく「神戸空襲を記録する会」の代表も兼務されていた。

彼の記録は綿密で節目節目でかならず記念誌や著書などに活動記録が網羅されている。文芸評論家の小島輝正氏をして「記録魔」といわしめたほど。彼の著作を年代順に辿っていくと、その足跡がわかる。

私も創立四十五周年記念誌『夢の跡めくれば』に「私のデスク日誌」として、事務局での思いを縷々綴らせてもらったので、ここでこと改めて書くこともないのだが、いい機会なので、戦後の焼け跡から神戸の文化復興を先駆けた市民同友会のウラ事情を少したどってみたい。

創立のころ

市民同友会は長田の「むろうち文化協会」（昭和二二年設立）に端を発し、その事業の一つとして始動。購入するたてものを担保に、銀行から三七万円の借金をして三二万円の物件を購入。残り五万円を当座の事業費にあて、エエトコ、エエトコ新開地とうたわれた新天地へ進出。

【昭和二三年】社団法人の認可を受け、「市民社会の市民」をうたい「市民同友会」発足。定款、第二章、第四条にはこう記されてある。この法人は、会員並びに社会一般の教養を高め、文化の向上を図るため会員のための常設の集会場を提供するとともに、市民社会の中核的推進体の役目を果たすことを目的とする。また第三章、第七条には「年会費千円」、とある。コーヒー一杯が三〇円、ゴールデンバッド一箱六円くらいの頃、闇ではそれが十倍二十倍に跳ねあがることもあり、悪いお酒をふっかけられないよう、安心して飲める「場」をつくろうというのも同友会たちあげの理由の一つ。「時あたかも料飲禁止の時代、月五〇円の会費で自由にアルコールがのめるという特典のため、たちまち三百名の会員が集った」。深夜まで食堂経営にあたり、洋裁、ダンス教室、文学など、会員の得意分野をいかした講座を開設。総力をあげた成果が実を結び、借入金の利息を払い、借金も少しずつ返済できる目処がつきかけた。が、しかし、順風満帆にみえたこの出帆が、その後の人事の刷新によって急速に減速し、「やがて一年後、食堂は開店休業状態となり、関係方面に十万円近い借財をかかえ、建物と事務員だけがのこった」と『市民同友会三十年史』に記録されている。

発足当初の理事の一人、落合重信氏の総括によれば「頼母子講に借金返済、事業費まで依存し、会費収入による運営を真剣にはからなかったことが原因」とある。この時すでにのっぴきならない事態が出来していたようである。風雲急をつげるこの船出は、のちに同友会伝説ともなった五年ごとの移転につぐ移転のほんの序章にすぎなかった。

君本事務局長の誕生

【昭和二八年】はやくも楠町六丁目へ移転。市民同友会が楠町六丁目への移転をひかえていたある日、役所へ就職相談に出向いた一人の青年は、窓口で応対した人物によってその人生を決定的に方向づけられた。

大学で「哲学に飼育され※」詩を書く二五歳。舞台監督をめざしたが、肺結核を病み断念。ストレプトマイシンにより回復。その後遺症による片方の耳に難聴あり、常時耳鳴りに苦しむ青年君本昌久氏を市民同友会に導いたその人こそ、むろうち文化協会のはえぬき、同友会立ち上げ人の一人であり、本誌『歴史と神戸』の主要メンバーでもあった落合重信氏だった。かくして、結婚したての君本さんは事務局長として迎えられ、大阪から神戸に移り住む。

（※詩誌『クワルテット』連載　君本昌久作「私小説」の主人公今村永一に語らせているセリフ）

素人集団の食堂経営は収益をあげるにはあまりにもスタッフの犠牲が大きすぎて、早晩たちゆかなくなっていく。一方、むろうち文化協会時代から継承しているカルチャー面では、神戸新聞主筆・畑専一郎氏を講師に、国際情勢をきく会、経済読書会、ドイツ語・フランス語講座、杉山平一氏による詩研究会、科学史の会など実に二五ものグループの多様なサークル活動を展開。

【昭和二九年】人事を一新し、事業面で起死回生をはかろうとした矢先、初代理事長岡村丹治氏（山陽電鉄社長）急逝。後任に小林芳夫氏を新理事長に迎える。小林氏は、神戸銀行副頭取、神戸証券取引所理事長を歴任された財界人。当時ミドリ十字社長）。以後二三年間小林理事長時代が続く。

【昭和三一年】この年、君本さんは処女詩集『贋の破片』（昭和二四～三〇年までの作品が所収）出版（衰弱するヴィジョン、エチュード、職がなくて）などの詩篇に加えて次のような作品もある。

…一九四五年夏―戦争が隠れ　詭弁と疑惑が黄色くなって　オレの家に降り落ちた　欺かれたのは誰で　欺いたのは誰だ　責罪と懺悔　デモクラシーと自由　それらが俺の眼の前で号外のように飛ぶとき　メスが脇腹を突き刺すようにＤａｄａ！　これこそ俺の渇望を排除してくれるチャンスだと考えた…（「姿勢について」部分）

この詩集のあとがきには、「この詩集には他者に対して驚かせるなにものもない」と述懐。モダニズム詩人として時代をかけぬけた君本さんの初々しい初期詩篇。

【昭和三四年】二度目のお引越し、三宮新聞会館塔屋へ。区画整理による立ち退きを迫られる。楠六事務所には業務委託の喫茶「サントス」が営業していたため、移転問題紛糾。善後策なく解散論も。だが、いざ白旗をあげかけたとき、神戸新聞記者なかまで同友会理事の畑専一郎氏、宇和川泰蔵氏などの奔走により、三宮駅前の新聞会館塔屋の空き部屋にひとまず移転先を得る。まだＫＣＣも山一證券もオープン前のこと。しかし、一年後には四階へ、またその一年後には六階へと、社側の都合であちこちさせられ、結局四万円の家賃がネックとなってついに新聞会館から撤退を余儀なくされる。

会員共有の場を確保する戦いが続く一方、文化に飢えた人々は砂地が水を吸うように、多様なサークル活動を展開。昭和三四年秋その独自な活動により「兵庫県文化賞」を受賞。

兵庫県文化賞

社団法人　市民同友会殿

戦後の社会混乱の時にあって同人相集り、地域社会の再建のため各種の文化活動を企画実行して明るい郷土の建設に邁進しつつある功績はまことに大きいものがあります。ここにこれをたたえ兵庫県文化賞を贈ります。

昭和三十四年十一月三日

兵庫県知事　坂本勝

右の賞状の文面をみれば、市民同友会がすでに社会的に認知され、発足当初の目的を達成しつつあることが分かる。

創立十年目にして年会費二千円に値上げ

政、財界、芸術その他あらゆるジャンルのエキスパートをあまた会員に要しながら、なぜにこうまで資金繰りに汲汲としなければならなかったのか。ああ、それなのに、さりながら豊富な人脈を糧に、市民同友会はさまざまなミラクルを起こしながら戦後の焼け跡から激動の昭和をこえて、平成五年まで、実に四五年を生きのびたのだ。

話は前後するが、私が事務局にはいってからもこの体質は変わらず財政難にあえぐ末期症状は続いていた。そのため、私の給料も十二年の間に五万円になり、四万円になり、そこからさらに減額を求められたのだが、私はこのときばかりは「否」を告げた。この頃すでに君本さんは自身の給料分を、借入金として市民同友会の会計にいれ事務所費に充てていた。それを私も知ってはいたが、お互い生活者である以上無償性には限界がある。君本さんは敬愛する畑専一郎氏こと「ハタセン」から、「法人格」の大切さを説かれたと酔うと語っていた。畑さんの推奨される「斬新的社会主義」をめざした「イギリスのフェビアン・ソサイティの精神」にならいたいと。インテ

リゲンチャのハタセンや、君本さんをとらえたフェビアン・ソサイティとは何なのだろう。インターネットで検索してみると、「漸進的な社会変革によって教条主義的マルクス主義に対抗し、暴力革命を抑止する思想や運動をフェビアン思想（フェビアニズム）と呼ぶ」とある。

その精神を純粋にうけとめ、ユートピアを夢みていたのはよしとしても、なにせ、世の中お金がなくては暮らせないのだ。ボランティアとは、本来は富裕層がめぐまれないもののためにパトロン的役割をするノーブレス・オブリーシュに由来するものではないか。

しかし、一緒に仕事をしていて台所事情を知れば知るほど、君本さんが気息園奄奄の市民同友会を死守しようとする、その真意が当時の私には理解できなかった。しかし、その無償性のゆえに理事会の面々も経営の核心にふれようとせず、君本氏に運営を託した格好で敬して遠ざけるむきもあったと、私は思う。

誰いうとなく君本さんを「しぐれの詩人」と呼んだ。夜も更けて「もう一軒」といわれるのをふりきって帰りかけると、さびしげな背中がゆらゆら闇に消えていく。ここでふりむいてしまってはいけない。孤独の影につかまって帰りそびれてしまうのだ。けれど引き返して、また一緒にお酒をのんだとしても、もうそこに彼はいない。

―真夏の夜の惨・飲み屋から　きみは　じつに一人だ…（君本昌久「時雨そのほか」（一行の「ことばしぐれ」部分）

けだし会員のボランティアに頼る組織は脆弱である。善意が善意であるだけに、許容が許容を際限なく増幅させてしまうから、やさしさに歯止めがかからないのだ。

総合雑誌『蜘蛛』の残したもの

【昭和三五年】君本昌久第二詩集『手』出版

…手は事件だ　血を流し　追いつめられて。やってくる…

総合雑誌『蜘蛛』共編出版を担当。『蜘蛛』は一九六〇年安保闘争の熱気のなかからとびだし、一九六五年、第八号を出して終刊している。しかし、スタート時にかかげられた五つの目標はこの五年間でほぼ達成されている。「①時代状況（安保法案の強行採決）をいかにうけとめ、いかに定着させるか。②神戸モダニズムの再検討。③神戸詩誌の記録。④詩壇の中央化を清算して、神戸における総合雑誌のありかたを組み立てる。⑤作品の高さをめざし、新人の実験の場を提供する」。伊勢田史郎・君本昌久・中村隆・安水稔和氏の四人は高い目標をかかげて船出したが、同人誌ではなく「雑誌」とし、依頼原稿による発刊を原則とし、販売を基本姿勢としたため、次第に財政逼迫。最終的には大赤字。四〇万円をそれぞれ負担する羽目になったと君本さんの記録にはある。蜘蛛の活動がその後に続く世代に残したものは、はかりしれない。造ることと、伝えることが表裏一体となっていたまさに最前線で闘ったグループであった。「蜘蛛」は詩人君本昌久を位置づけたともいえる。

「声なき声市民の会」と連動した展開

安保強行採決に議会制民主主義の崩壊を危惧した東京の小林トミさんが安保反対を訴え、一人でデモをはじめた。神戸でも神戸商大の亀高洋介氏のよびかけにより神戸「声なき声市民の会」発足。その運動に市民同友会も連動。「鉄の肺」をおくる運動、医学問題研究会、土井たか子を囲む会、女性の憲法勉強会、韓来文化を語る会、性と性教育を語る会などが、次々生まれた。

【昭和三六年】（三宮新聞会館時代）雑誌『蜘蛛』解散をうけて君本さんは「蜘蛛出版」を一人ではじめる。

【昭和三七年】四度目のお引越し。灘・神戸生協山手センターへ。

「神戸史学会」誕生。誌名『歴史と神戸』の名称は君本氏発案。五七号まで編集にかかわ

り表紙絵を描く。「マネービルの会」、「カタルシスの会」、「ラ・ノメールの会」など発足。創立当初のあの賑わいを取り戻そうと、「のむ会」に起死回生の夢を託したようだが、もはや戦後ではなかった。

【昭和三八年】創立十五周年を祝う。君本昌久第三詩集『分別ざかり』・続『分別ざかり』出版。

…くれないか　ぼくにくれないか　走りだしたら止まらない子供を　くれないか　拗ねた瞳でパパを打つ　すがすがしい　情事を　くれないか…」（「くれないか」部分）

彫刻家ロダンの弟子であり恋人でもあったカミーユ・クローデルに、同名の彫刻がある。妻と恋人との間で揺れ動いたロダンが、最後は妻の元へと去っていく姿を描いたものといわれている作品があり、タイトルは意味深長だが、彼にとって、はじめて授かった子供を流産により失ったいたみが痛切。

【昭和三九年】市民同友会機関紙「市民情報」四〇〇号へ。

【昭和四〇年】ついに五度目のお引越し。山手から再び三宮へ。灘・神戸生協店舗改造のため立ち退き。会員の北山司氏の三宮事務所を一三〇日間無償で貸与される。

【昭和四一年】六回目、三宮センター街東口・宮脇ビルへ引越し。

「市民の学校」開設。

安保闘争に挫折し、行き場をなくした若者たちの反骨精神を喚起させる「大学にあきたらない若者よきたれ！！マン・ツー・マンの寺小屋方式」をうたって二五〇人のハートをキャッチ。

この年　君本昌久第四詩集『非歌』出版。

束の間と愕然の谷間にはさまったフランツ・シナトラ氏は　他人にとっては死んでおり　無表情な仮面の顔を象徴しているらしい　なんという誤解だろう（「非歌」部分）

【昭和四四年】市民の学校機関紙『文学塹壕』創刊。「塹壕」と名づけるあたり、まだ戦争をひきずっている。

【昭和四五年】第五詩集「仮名手本詩乱四十七行その他」出版。

欲望の窮鼠蚊族生死死私害の糜爛怒々詩にさわらせてはいけないパニックが蘇る

底墓となく口惜しさが罅割れどうしても蚊が白ける時間を深遠に攪拌しても胡乱々々（「仮名手本詩乱四十七行その他）より

「空襲を記録する会」に心血注ぎ

【昭和四六年】神戸空襲を記録する会発足。「記録する会」は一九七一（昭和四六）年の発足以来戦災遺品の収集、犠牲者名の調査と慰霊祭、慰霊碑建立、『神戸空襲体験記』の編纂、資料室の設置、自主制作映画の上映会と、はじめの十年で相当な成果をあげている。

戦後も四半世紀をすぎ、戦争体験の風化を懸念する人々が、ようやく重い口をひらいてその体験を語りはじめた社会情勢が背景にあったとはいえ、君本さんの活動は全国連絡会議においてもその中核にいて結束をつよめ、士気をたかめた。三省堂の『日本の空襲』の近畿篇も彼の仕事だ。

【昭和四八年】またしても移転問題浮上。宮脇ビルより四万円から十万円へ家賃値上げ通告あり。進退極まる。ついに高取山の君本事務局長宅に撤退を決議。だが事態は急転回。またもや三宮「そごう」東、小野柄通の北村ビルへ七回目のお引越し。いよいよ君本事務局長宅に撤退を決めた直後、北村昭太郎氏を紹介され、急遽三宮へ移転。

【昭和五〇年】君本昌久第六詩集『時雨そのほか』出版。

…夜明け前の海岸通を　一行のことばしぐれとなって　きみは火の車と一緒に　とどまることなく　歩いて行く（「一行のことばしぐれ」部分）

【昭和五一年】『火垂るの墓』・『１９４５・夏・イン・神戸』の作家・野坂昭如氏を招き、記念講演会開催。舞台でウイスキーを飲みなが

らのワン・マン・ショーに君本さんも加わり観客も酔いしれた。この時、野坂氏は会が用意した謝礼を受け取らないばかりかそっと十万円をおいていかれた。

君本さんの評論集『詩人をめぐる旅』に記された野坂さんに関するこの記録をよんで、その昔、なにも知らずに餃子屋ユニコンで野坂昭如の「黒の舟歌」を無邪気にうたっていた自分たちはなんと間抜けであったことか。あのうたは、君本さんが唯一こころからうたえる歌だったのだ。神戸空襲を知る野坂昭如氏の無償の行為は、孤独なオーガナイザー君本昌久を慰藉するに足る出来事だったのだ。そんなこととも知らないで、私たちは、みなそれぞれおのれの闇にむかって艪をこいでいた。

…あれから幾年　漕ぎ続け　大波小波　ゆれゆられ
極楽　見えた　こともある　地獄が見えた　こともある…（「黒の舟歌」）

解散論浮上、空襲の記録に成果

【昭和五三年】市民同友会創立三〇周年を祝う。火の車をここまで牽引し続けてきた君本事務局長も、最早ここまでと、これまで棚上げしてきた給料をもうチャラにしてもいいのでやめたいと本気をみせる。しかし、吉田松陰の松下村塾のようなものをめざしたいとする君本さんのライフワーク実現のためには、市民同友会のような組織は必要だろうと、理事会から慰留され解散問題はひとまず棚上げとなる。結論をさき送りにして成り行きみようとするのだが、組織の加齢が士気の低下を招いていて、ことの解決にはならない。このとき君本さんが理事会に提出した覚書が畑氏の提案により「君本クン解散憲章」として残される。しかしこの一件で市民同友会の命運は君本氏に託されることとなる。

三月　小林芳夫理事長逝去。

【昭和五四年】畑専一郎氏理事長代行就任。

『君本昌久選詩集』出版。（戦後は燃えつきた宣言）

『日本の空襲』　近畿篇　執筆（三省堂）

【昭和五五年】畑専一郎氏理事長に就任。ヘッドハンティング時代が終わり、会員の中からはじめての理事長誕生。

【昭和五五年】畑専一郎氏逝去。理事長の相次ぐ死に君本さんの憔悴はひととおりではなかった。私が事務局に呼ばれたのは、その直後のことだった。

【昭和五六年】長年にわたる神戸市との折衝が実り、大倉山の中央図書館旧館一階に常設の戦災記念資料室開設。記録写真集『炎の記録神戸大空襲』出版。

（※平成七年の阪神・淡路大震災の直接的な資料被災はまぬがれたが、図書館被害甚大のため資料室撤退。資料のごく一部は現在兵庫図書館に展示されているが、残りの資料は中央図書館の地下室にお蔵入りしたままとなっている）

【昭和五七年】尾崎治氏理事長就任。尾崎氏も畑専一郎氏も「亡くなられた先代理事長の小林芳夫氏にもう一度会えるなら、あの世へいくのも悪くないかな」と異口同音に語っている。畑氏にいたっては、「市民同友会のひとはみないいひとばかり。じつにここは人間ぎらいの自分にとって『人間教室』だった」と書き残されている。

しかし、今もし私がハタセンに会わせてもらえるとしたら、私は「いいひとばかりの集りはえてしてキケンです」と反論したい。もっとも市民同友会がもう存在しなくて、ここをこよなく愛した人達がいなくなってしまった今だから言えることだけれど。

この年、君本昌久詩論集『詩人をめぐる旅』出版。

【昭和五八年】『いろまち燃えた福原ノート』出版。空襲記録を収集するなかで「福原に遊女の被害者はいなかった」というある人の発言に疑問をもち、関係方面への取材に歩く。

それをまとめたものが三省堂から出版された。渾身の一冊。

厳しさ増す財政、解散へ

【昭和五九年】君本昌久第八詩集『デッサンまで』出版。

…いつまでゆめみれば　もえつきるのか　こいでもこいでもたどりつけない（「ゆめのあとさき」部分）

【平成元年】会員年会費三六〇〇円に値上げ。このころ北村ビルの階下の喫茶店「ヴィヴァ・カフェ」のコーヒーは一杯三〇〇円也。会員のふところはいたまないが、物価は変動しているので、事務局はこれでも大変。だが、月三〇〇円の会費でなにを守ろうとしているのだ、この会は（これは当時事務局にいた私の思い）。

【平成二年】蜘蛛出版一〇〇冊突破。君本さんがひとりではじめた出版社で詩集、評論集の出版が相次ぎ、ついに、一〇〇冊突破。

本よ紙よ書くヒトよ汝らの私害に胸がつまる蕺の白い花びらは過ぎ去った日に腹々

文明がすすんでいくことへの期待といきすぎを危惧し、自費出版流行に苦々しい思いを抱きながら自身もまた他人の本づくりに一役も二役もかっている。

この年、老朽化したビル解体のためと、北村ビルより立ち退きを要請される。オーナーの北村氏が亡くなられ、家賃が二年ごとに値上げされることとなる。そのうえ、教室を稽古場に使用していた村上翔雲氏の書道教室が契約解除。さらに、バザーにサンプル賞品を無償でゆずりうけていた灘・神戸生協から打ち切りが通達され、会員の持ち寄りバザー「ないもの市」の収益は一気にダウン。いよいよ事態は深刻に。文芸評論家、倉橋健一、カウンセラー中村啓子氏を援軍に、市民の学校の受講生にも呼びかけ、市民同友会の会員に勧誘。会費六千円に値上げ。

【平成三年】ついに八回目のお引越し。北村ビル撤退。三宮から元町鯉川筋・北丸ビルへ。立ち退き保証金一千万円の条件をのみ、八度目のお引越し。この時、君本さんの胸中には、すでに市民同友会の余命三年のカウントダウンがはじまっていた。家賃一五万円。前の二倍はあるスペースと、事務机が向かい合わせに二つ置けるスペースが別途にある。ＪＲ元町駅を北へ五分のところ。鯉川筋に面した明るいオフィス。君本さんは出勤すると、デスクには座らず教室の大きな机に詩稿をひろげ、繰り返し手をいれていた。それが九冊目の詩集となった。

【平成四年】君本昌久第九詩集『ぼくの第九』出版。自身への鎮魂歌であるようにもよめる。先の『デッサンまで』の詩的試みはすっかり沈静し、リアリズム調の詩でまとめられている。空襲を記録する会を共に牽引してきたジャーナリスト松浦総三氏と姫路で再会。その老いを見つめる。

もし、君本さんが空襲を記録する会の事務局をひきうけていなかったとしたら、これほどまで戦争への拘りがここまでうたわれることはなかったのではないだろうか。

第一詩集から最後の『僕の第九』にいたるまで、戦争の記憶が重くかげをおとしている。

…あの時　六月二十二日の姫路では　二百五十戸の朝鮮人部落が吹っ飛んで　首が飛んだ赤ん坊を背中に括りつけたまま　母親は炎の中を必死に逃げまどった　その凄まじい記録にコトバたじろぐ　六月の火の雨　涙のすべて　ひとは涙のすべてを知るだろうか（「ぼくの第九」部分）

【平成五年】尾崎治氏脳梗塞に倒れる。ポケットマネーで新会員獲得のため奔走された新理事長無念のリタイアー。

【平成六年】市民同友会創立四五周年記念誌『夢のあとめくれば』出版。市民同友会ついに解散。

八月、東京から歩いて広島をめざす平和行進の一行を御影公会堂で待ち受け、講演する

はずだった君本さん。当日朝とつぜん肺気腫の発作に見舞われ緊急入院。
市民同友会は君本さんにとって生きがい、すなわち、いのちそのものだったというかのように、その後入院退院を繰り返される。そして食道がん発症。手術を拒み面会拒絶。
【平成七年】阪神淡路大震災。
【平成九年】三月、君本昌久氏ついに逝く。六八歳。九冊目の詩集『ぼくの第九』は、死と対峙する日々の絶唱。

おわりに

はたして、君本昌久はことばで時代を切ったのか時代にことばが斬られたのか。彼がなくなって一四年たった今静かに詩集を読み返してみると、迸るメタファのかげにモダニスト詩人君本昌久の意外な側面が見えてくる。『贋の破片』から『ぼくの第九』まで、九冊の詩集と詩論集、その他編著『市民同友会三〇年、三五、四五周年記念誌』、『炎の形見』、三省堂から出版された『いろまち燃えた福原ノート』など、六八年のその生涯に残された著書をひもといていくと、戦後の神戸で生き、修羅のごとく「ことば」と戦ってきた彼の矜持と哀しみが時雨のようにふってくる。

神戸在住の詩人季村敏夫氏の『山上の蜘蛛』と『窓の微風』と相次ぐ出版によって「君本昌久の仕事」に今、光があてられている。

「…何処ででも一つの価値があり　何時でも一つだけの美しい仕事があることを確認して　秘かにその一つだけを男らしく欲望していた…」

その若き日に、このように志ざし、ついにそのように人生を全うしたその男は、『社団法人市民同友会四五周年記念誌『夢の跡めくれば』にこう書きとめている。
しかし、ハタセンに飲み屋で熱く語られたフェビアン・ソサエティーへのあこがれも、新開地の路地裏からスタートしたイミも、所詮は、若き日のハタセンが理想としていた夢と現実だった。

理事長として解散を決め、マインドコントロールから解放され、市民同友会四五年の歴史に自ら幕を下ろした男のなんといじらしくも切ないつぶやきであることか。
はたして、私のうたたねにあらわれたあのへんなオトコは誰だったのだろう。それは、詩人君本昌久氏の分身、フランツ・シナトラ氏であったかもしれないし、あるいは私自身であったのかもしれない。

フランツ・シナトラ氏とは、人間、君本昌久のはにかみであり韜晦であり戦術そのものである。

（２０１２年「歴史と神戸」２９０号～特集君本昌久と戦後神戸の市民運動～より転載）